
魔力ゼロのチート勇者。

SYO

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔力ゼロのチート勇者。

【Nコード】

N2024Y

【作者名】

SYO

【あらすじ】

不運な事故死で、一度人生をログアウトした少年坂町 さかまち 揚羽 あげは が、事故から庇った少女こそは人間の状態は仮の姿で、ホントは神様であり、その神様ことルルが謝礼を込めての異世界転生というライトノベルのよくあるジャンルを引っさげて異世界を冒険するといったことを綴る物語。

- -とまあ出だしはよかったものの、ルルの手違いでまさかの魔力ゼロに!!! さて、魔力がなくなっただけにより若干の不安が身に

寄る……。

S・『プロローグ的な話』

今から綴られるこの物語は、俺こと坂町さかまち 揚羽あげはが突然不運な事故死によつて齡17にして人生からのログアウトをした所から始まる。

さて、今の状況を3単語でまとめてみよう。

天地

真っ黒

ヤバイ。

お分かりいただけただろうか？

そう。人は死んだら『ドラゴンボーズ』と呼ばれる少年マンガと同じように魂が赤、青の鬼達によつて一列に指導されて閻魔様が天国と地獄を決めているわけではないのである。

先程まとめたように、『無』と言うに等しい景色の中でフワフワと浮いているだけだったのだ。

限りなく暇。

それもそう。

ただ浮いているだけなので。

浮いているだけだったのだ。

非常に必要なので3回言いました。

あ、暇ついでに俺の死因について話しておこう。

- - 事故死。

飛び出し注意！ と描かれたポスターを想像してくれたり、はたま

た『幽霊ハクション』と呼ばれる、仕事をしないとあるゲーマー漫画家が描いたマンガの主人公を想像してくれば正解かな。

最も俺の場合は、相手側が運転マナーのご法度であるケータイ片手に『電話しながら運転』をしていたため、信号に気づかず歩道を渡る小学生（女の子）を跳ねようとする状況だったので、必死に走ってその子を庇った結果がこれである。

つまり何が言いたいかと言うと、

運転マナーは守りましょう。

ホントにこれは守ってほしい。

今回のような状況に、もし読んでる貴方達が実際になったとしたら？考えるだけで恐ろしいでしょう。

とまあ、俺の死因についてはもう終わったことなのでいいとして、轢かれそうになったあの子……俺の意識が消える前に何か言ってたような……。なんだっけ？

すると真っ黒で固められてたこの世界に、突如神々しさをも表す一筋の光が射し込んで、やがてはそれが世界に広がった所に入らしきモノが見えるようになる。

「やっほー」

「君は……」

それは生前に俺が助けた女の子であった。

「ようこそ虚無の世界へ。居心地はどうか？」

「胸に雲がかかったかのようなモヤモヤ」

素直な感想を持ってきた。

「中々詩人なのは良いとして、どう？ 改めて自分が死んだことに対しては？」

「小学生の女の子が饒舌に世界を語ってくるのに驚愕したのと、あー俺死んだのかーという感情かな」

人は脆いとはメディアを通じて一応脳の隅っこにはしまってたけど、実際に死んでみて三途の川とか彼岸花とかも何も無くてビツクリ。まさに無だもの。

そこで俺はテンプレとも言われるセリフを彼女に放つ。

「君は一体何者なの？」

「神」

啞然。

「それがホントだったら俺は今、神様と対峙してるという宗教徒の願望を成就させた奇跡の人間1号となるわけだけど？」

「そんなことないよ。私にあつたことのある人間なんて結構いるよ」

これまた啞然に続いて呆然。

どうやら言ってることはマジでらしい。

「それとね、私は貴方に・・・」

「揚羽。坂町 揚羽」

神様である彼女の言葉を遮り自己紹介。

「アゲハね。私はルル」

「ルルね。よろしく」

彼女――ルルも折り返し自己紹介をする。

「それでね、アゲハに言うことが1つあるの」

「もしかとは思うけど、自分のせいで一般ピーポの俺の人生が口グアウトしたことに責任を感じて、転生させてくれるわけだ――異世界に」

「すっごーい！」

なんて物分りの早い少年なの！ ってルルが思ってくれたら嬉しい。

「そうだよアゲハ。いわゆるライトなノベルにありがちな異世界転生というジャンルを引っさげて、新たな人生に口グインするんだよ！」

まさに王道。

俺が死ぬ日の前夜、そんな感じの小説を読んでいたもんだ。

「じゃ、転生しようか」

「ちょい止まれ――！」

あまりに早すぎた出来事に声を上げる俺。

まあ、物分りが俺の倍の倍の倍はあるみなさまならもうお気づきでしょう！

「なに？」

「お前……まずは異世界の特徴については教えてくれよ」

「あ、そうね。いうならばファンタジー。魔法やら精霊やらを想像できるライトノベルに多いであろうジャンルの世界よ」

「王道中の王道の世界設定じゃないの。てか、俺は転生する人間というこれこそライトノベルの異世界転生主人公における特権ということで、それに合う能力というのが欲しいのですが」

「えーっと、つまりは人気ファンタジーゲームの『竜クエ』や『F
ファンタジー
フラクタル・
F』のような能力が望みと？」

「うん。王道にライトノベルというチートにチートを重ねた作者のご都合主義的主人公で頼みたいんだけど」

「オツケー、じゃあそろそろ異世界に転生するよ」

ルルが手をかざすと、俺の意識が徐々に消えはじめた……。新たな人生の幕開けだ……。

最後に冒頭で言ったことをもう1度。

これは、不運な事故死により一度人生をログアウトした少年である

坂町 揚羽こと俺が、ライトノベルのよくあるジャンル異世界チート物を引っさげてここに綴った物語である。

1.「アゲハ5歳」

こんにちは。

不運な事故死により異世界転生をした俺こと坂町 揚羽です。

この世界に転生してからおよそ5年近く経ちました。

つまりは幼稚園年中の年齢というわけ。

しかし自分が1度死んで、この世界に転生をしたという事実はこの年になるまでは気がつかなかった。

1歳また1歳と年齢が増えていく度に、前の世界での自分の過去が映像として流れてきて、徐々に人格が過去のものとのものと融合する。

5年経った今では前の世界の記憶を6割思い出し、幼稚園児ながらも1人称は俺というなんとまあひねくれたガキが構成されたわけだ

9

と、記憶が戻った所で俺をこの世界に転生させた神様 - ルルの言ったことを思い出し、この世界のことを自主的に調べ始める。

別に5歳児らしく「ねーねーおかあさん」と愛くるしい態度でもよかったが、俺の自己分析した性格上では、他人に聞くより自分で調べると頭に入りやすいといういかにもデイス・コミュニケーションの鑑のような性格だったため、こうして家の中にある書庫から地道に調べるのであった。

その中で色々なことがわかった。

この世界の名前は『セルビス』と言って、ゲームやらライトノベルのファンタジーと全くの同じようなタイプで「精霊」と「妖精」と「人間」と「魔物」が共存する剣と魔法の世界だった。

世界は4つの大国が世界を総ており、順番に

火の国『ファイアラン』
水の国『アクアリウム』
風の国『ウィンドル』
地の国『ノームホレマ』

とまあ、いかにもって感じの世界観であつたが逆に嬉しかった。

- - この世は腐っている。

なんて『死のノート』というマンガにあつたセリフを引用して前の世界での日常を振り返る。

平日はつまらない授業を受けに行き、休日では『お前ら』と呼ばれし人種の掲示板サイトをチラッと覗いて終了。

友達から遊びの誘いもあったけど、楽しいと感じる時間は極小。

- - でも、今は違う。

現実では無かつたことがここではできる。

俄然胸の奥から、この世界に対する高揚感が上がってくる。

パタン。

この世界について綴られてる本を閉じる。

完全に前とは違う自分。

これから始まる新しい自分。

そんな人生はどうやってこれから進んで行くのだろう。

- - そう思うと胸が躍るのは、それはきつと前向きに事が進む前兆

だと俺は思う。

さて、これ以上は何か悟りが開いてしまうような気がしてならないと俺は感じた。

悟りと言えば、かつて俺が『竜クエ3』その後伝説へ……』というゲームをプレイした時に作中で手に入れた『悟りの書』というものがあつたのを思い出した。

たしかそれを使うと魔法を使う職業では最強になる『賢者』という職業になる。

その他にも『遊び人』というクソニート同然の職業もあつたなあ。

確か唯一『悟りの書』無しで『賢者』になれる職業。

それを初めて知った時は、『遊び人』の事をまるでゴミカスを見るような視線でプレイしていてホントにごめんねって涙を零したのもまた懐かしい……。

それに涙を零したといえばもう1つ。

いや、この場合は零してはいないが何か儚いものを感じたと記憶はある。

フラクタル・ファンタジー
『FF11』

基本は1人でプレイする『FF』のシリーズ初オンライン体制となつたゲームだ。

オンラインといえば、素性も知らない相手との協力プレイが可能でそれをきっかけに仲良くなったり、現実で実際に会ってそのゲームについて語ったりすることもできる。

確かオフ会ってやつだ。

で、話が逸れたが俺がこれに涙した理由は『FF11』発売のCM。

『また弟くん1人でゲームしてるー』

というかわい姉の発言に対して、

『……1人じゃねえよ』

そして無愛想な弟くんのプレイするゲームの画面右下のチャットと呼ばれる会話欄のところに、

『頼りにしてるよ、俺たち仲間じゃん』

『……へへっ』

あまりの切なさに全俺が泣いた。

こういうデイス・コミュニケーションの手本となる物が社会にN^要_{不適職者}eedされないNetを生むんですよ。

あ。

そうだ。

ゲームで思い出したんだけど、今1つ大切なものを忘れてた。

- - 魔法。

確か俺は5年前……あくまでこの時間軸での5年前だが、ライトノベルの主人公にありがちなチートにチートを重ねた能力を欲しいってルルに言っただけど、どうなんだろう？ 今普通に、例えば無難にファイアーボール【火の玉】とか口ずさんでみたら実際に使えるのだろうか？

よし、試してみよう。

「アゲハ〜ご飯だよ〜」

ディナーの後で。

??

転生先のお母さんの料理をたらふくたいらげて、外へと出る。

時刻は17時。前の世界より文明の発達はかなり遅れてるが時計だけは造られてた。

誰もいない家の裏。

そこで俺は左手足を前に出す構えを取って、息を吸い込む。

とりあえず……試しに『テイルス』シリーズに登場する魔法のイメージをする。

小さい火の玉が手に現れ、それを放つイメージ。

伊達にライトノベルやらゲームをやってないので、魔法に対するイ

メージは得意である。

そのうち【断罪の光】デバインク・セイバーとか使えたりして……。

おおっと、まずは試しにやるのが最優先。

再び息を整え、目を瞑る。

右手にじわりと温もりが溜まっていくのがわかる。

その暖かさを燃え盛る火に変え、玉にするっ！

そして、一気に放つッ！！

「ファイアーボール【火の玉】！！！！」

手に溜まった火の玉は勢いよく放たれ、地面は燃えるッ！！……ハズだった。

「――あれ？」

おかしい。

確かに俺はこうしてこの世界に転生した。

だったら魔力もチート級になってるハズ。

「考えても仕方ない……もう1回！」

??

「はぁ……はぁ……」

かれこれ1時間くらい【火の玉】ファイアーボールを唱えたが……

――結果は何も出ず。

「なんだよちくしょう……どうなってるんだ……？」

そんな事を漏らしながら、1つの答えに辿りつく。

ルルのやつ、もしかしてチート能力を付けるの忘れてた？

……。

……。

……。

「アゲハ〜！　いつまで遊んでるの！　早くお家に入りなさい！」

「……はい」

悲愴感を引つさげた返事をお母さんに返して家へと帰っていく俺であつた。

2・「アゲハ7歳」

異世界転生の醍醐味である『チート』

それは転生者が別世界を、まるでリア充のように楽しめる一種のツールだ。

しかし、俺を転生させた神様 - ルルは少しかりそのツールを俺に付けるのを忘れてしまったようだ。

そんな事を家の書庫でゆつたりと考える俺、坂町 揚羽は別世界『セルビス』で7年過ごしている。

社会的に言えば小学校1年生、もしくは2年生だ。
話を戻そう。

ツールのもたらす機能、それは『ドラゴンボーズ』でいうならスーパーヤサイ人。

『ワンパーク』でいうならガムガムの実。

『とある魔法の目次録』ならイマジネーション・ブレイクと、他に言えばキリが無いような能力を付けて、初期アベレージ高め（最強と言っても過言ではない）の主人公として転生させてくれる予定だったが、

何かの手違いでその能力、そして全ての魔法の源である魔力が無いままの状態で転生。

そして今に至る。

別に不満は無い - - と言っちゃウソだが、ルルに会わない限りはどつしようもないんだけど。

パターンと魔法に関しての本を閉じて、元の場所へ戻す。
部屋から出ようとした矢先に、母さんがそこにいた。

「またここにいたのね」

エプロン姿の母さん（もちろん転生先）

顔は凜として、紅葉の如く鮮やかな長い赤髪をリボンで結わえて右肩の前に垂らしている。

ちなみに俺も母さんのキレイな赤色を継いだウルフカットだ。

そして母さんは続けて、

「家にはっかりに居ないで、たまには外で遊んできなさい！」

少しムツとした表情で言う母さん。

それもそうだな、と心の中で思いながら「分かったよ」と返す。多分外に出るのは今月に入って2回目。

家で本ばかり読むのが俺のステータス。

記憶を取り戻してから2年でこの家にある本は全部読破した。たまには町外れの木陰でボーツとするのもいいかもね。

ガチャリと玄関を開けて空の快晴具合に感心する。

あーこんなキレイな空色、前の世界じゃ絶対見れない光景だわ。地球温暖化とかオゾン層破壊とかヒートアイランド現象とかその他の環境問題云々のせいで絶賛地球崩壊中！ と、乱雑な韻踏みで気分は既にオーバーグラウンドのようだ。

こっちの世界は前の世界よりか音楽発達してないもんなー……。

あの時は謎の戦慄が走った。

『子供レンジャー』や『^{モサド}猛者怒』が恋しい。

音楽プレーヤーにヒップホップばかり入ってたのを思い出す。俺の友達の多くは『^{ラッドウィンプス}羅津度雨印譜水』とかいうよくわからんバンドが

神とかウザいくらいに騒いでたのも思い出した。

……そうだ。

あっちの世界、今どうなってるだろう？

若干気にする俺。そして目的の木を前にする

さて、今日は1日中ここでボーツとするか。

と、そこで異変に気づく。

いや、異変というのは俺の見方で、誰だって木陰で休憩もするさ。誠に勝手ながらも、俺の特等席に誰かが座するのは少し嫌だった。近づいて木陰で休んでる奴の顔を覗く。

女の子だ。

小さい体躯に幼い顔立ち――目測は俺と同じ7歳と見て、垂れ目の翠色と、クリーム色のショートボブヘアだ。

『おんがく！』という女子高生ゆるふわマンガの主人公、ひらせゆい平瀬唯に似ている。

その平瀬唯似の女の子はスヤスヤと寝ており、更には横で柴犬らしき犬も一緒に寝ている。

「……ん……」

どうやら起こしてしまったらしく、女の子が重い瞼を開こうとしていた。

「……だれ？」

思った以上に女の子の声がアニメ版『おんがく！』の平瀬唯に似ていて驚いた。

俺はロリコンじゃないんだけどこれはヤバイ。俺の中で何かが目覚

めそうだ……！

と、そんな気持ち悪い妄言は置いて自己紹介しよう。

「俺はアゲハ。アゲハ・スロープタウン」

ちなみにこの名前は坂町 揚羽の坂町ってところを英訳したやつだ。
偶然にしても嬉しい。

「あげは……？」

まだ眠いのか、瞼を擦りながら話す女の子。

「よいしょ」

と、女の子の隣に座る俺。

見た目は子供！ 頭脳は16歳！ とか言ってお嬢ちゃんお菓子ど
うだいフヒヒなんて邪な事なんて考えてませんよ決して。

「ここ、俺の特等席なんだ」

木に凭^{もた}れて緑に彩られた葉っぱ越しに空を眺める。まさに暇人の極
みとか皆まで言うな。

「そうなんだー、実は私もなんだー」

緩い声色で話す女の子。ヤバいかわいい。あれ、この発言は（以下
省略）

「君も？ ここは落ち着くからねー」

ここでジャイアニズムを発動させるほど器小さくありませんよ私。

「うん！ リツも気持ちが良いって。だから私もここが気に入ってるんだー」

「リツ？」

「この子！」

本当に気持ち良く寝ている柴犬を指差す。

リツと言えは『おながく！』に登場する平瀬唯の友達で音楽部の部長りっちゃんこと『田中律』たなか りつを頭に浮かべる。

性格は活発な女の子だったので、この犬もりっちゃんと同じく活発なのだろうか。

「かわいい犬だよね」

「ありがと。あ、私ハナ！」

思い出したかのように自己紹介する女の子――ハナ。
そこでたわいも無い話を色々して、気が付けばもう夕暮れ時になっていた。

「あ、もう帰らないとー」

ハナが呟く。

「そうだな。お母さんに怒られちゃう」

「お母さんこわい？」

「怒ると怖いよ」

「じゃあ早く帰らないとね」

「だね」

重い腰を上げて、ズボンに着いた土埃を払う。

「じゃ、俺あつちだから」

「うん！ また明日！」

踵を返してハナと別れる。

鳴かないカラスに西に沈む丸い橙色を横目にして、家へと足を進めるのであった。

??

町の入り口近くの赤い屋根の煙突付き木造一軒家が俺の家だ。

愉快に煙が空へと上がっていく。家に近づくにつれ、包丁がまな板を叩く音と完成間近の料理の匂いがする。

今夜はシチューか。

まろやかクリームの味わいに、蕩けるような舌触りは癖になる。その匂いに俺の胃袋も反応ありだ。

「ただいまー」

扉を開けてそう言うと、台所から「おかえりー！」と陽気な声で母

さんが返す。

靴を脱ごうと足元へ視線を動かすと、靴が1つ多い事に気付く。大きさからして男の靴だとすぐに分かった。

「母さん、もしかして・・・」

「そうよっ！ 父さんが久しぶりに帰ってきたのっ！」

俺が言う前に母さんが顔を覗かせてそう言った。

なるほど道理で母さんがキャピキャピしてる訳だ。ちなみに年齢は28な。

脱いだ靴を揃えて上がると、木が軋む音が聞こえる。

帰ってからは手を洗うという長年（前の世界）の癖が体を動かし、足取りは洗面所へと向かっていた。

「～」

洗面所に近づくにつれ、側にある風呂場から愉快的鼻歌が聞こえた。その主は父さんで、久々にこの鼻歌を聞くのも懐かしく思える。手をキッチリ洗い、タオルで水滴を拭ってリビングへ向かう。

「・・・あれ？」

違和感。

リビングに置いてあった家具や小物がほとんど無い。おかしい。

朝見た時は確かにあった。

……。

……………。

ま、考えても仕方ない。

俺は頭が悪いのです。

「はー……殺風景」

思わず呟く。

それもそのハズで、この部屋にある家具は今俺が座ってる小麦色のソファ―と茶色のテーブルと赤（母さん）青（父さん）緑（俺）と色取り取りのイス

そしてアンティークの時計が刻むリズムが部屋を埋めるのみの光景。これを殺風景と言わず何という。

もしかして他の部屋も同じか？

1つの疑問を解決するために真っ先に向かったのは俺の部屋だ。

扉を開けると、

「あれ、俺のは置いてある」

意外だった。

机上に乱雑した本や、俺の寝相が悪い事が分かるように飛ばされた毛布。全てが朝からのままだった。

他の部屋も調べたが、所々殺風景な部屋もあればそのままの場所もある。

なるほど、模様替えか。

我ながら何という頭の悪い答えだ。自己満足にも程がある。

もう考えるのを辞め、リビングへ向かう。

すると母さんが人数分のシチューとこれまた赤、青、緑のスプーンを用意していた。

うまそうだ……。

思わずヨダレが出る。

実際には食べた事はあるから美味しいのだが、何しろ久々のシチューなのでそういう思考が浮かぶ訳ですはい。じゅるり。

「ふっふん」

母さんの鼻歌は、前の世界で言うどこかのショッピングモールのそれに似ている。

用意を終えて、エプロン（もちろん赤色）を着けたままイスに座る母さん。なおも機嫌が良い。

20代後半なのに未だ10代のような見た目は近所の方からも羨ましがられる程だ。

すると、リビングの向こうから足音と木の軋む音が聞こえた。

「おーアゲハ。帰ってきてたのか」

現れた筋骨隆々の体躯に青い寝間着を着て、青い短髪に両眼をした青年が――つまり俺の父さんが俺に向かってそう言った。

「おーおー、すっかり大きくなりやがって!」

久しぶりに息子に会った嬉しさを隠さずに、俺の方へと足取りを進めてきた。

「何年振りだ!? 1年か!？」

「あー……そんなもん?」

「なんだよつれないなー！ ほら！ 久しぶりの父さんだぞ！ 嬉しくないのか!？」

見た目の色とは真逆の性格の父さん。
そして母さんが、

「父さん、早くしないと父さんの好きなシチューが冷めちゃうよ」

「おおっと、そうだったな！」

母さんに言われ自分のイスに座る父さん。口からヨダレが出ている。見た目と匂いだけでヨダレを出してしまう所を見ると、やはり親子なのかもしれない。

父さんが掌を合わせ、

「いただきます！」

「いただきますーす」

俺と母さんも復唱。

スプーンでシチューのホワイトソースとご飯の比率を4：6で分けて、口に含む。

口いっぱい広がるシチューの香りに、1回2回と噛むとソースとご飯が程よく絡まり、且つ暑すぎず冷めすぎずの絶妙の温度。

・・・完璧だ……。

これを美味しいと言わずなんて言う。

市販のレトルト食品とは違って、こつちの世界は地産地消ってこともあってまず新鮮で安心。

同じ煽り文句としても基準が違う。手が止まらない！ ドンドン食欲が増えてくるッ！

よし一旦落ち着け俺……。

思わずどっかのマンガのようなコメントを残してしまうところだった……。

水の入ったコップを手にとって水を飲み、喉を潤す。

そこで父さんのシチューを覗いてみた、

「ごちそうさま」

「早っ！」

余りの早さに驚き、思わずツツコむ。

「母さん、おかわりあるかな？」

「あるよー」

嬉々として台所へ向かう父さん（27歳）その姿はまるで子供だった。子供の俺が言うことではないが。

かく言う俺は、もうすぐ食べ終わる寸前だった。余りにも美味いから早めに食べ終わると何か損した気分だ。

「ごちそうさま」

そう言って皿を持って行こうとした時、

「アゲハ」と、母さん。

「ん？」

「お皿片付けたら、戻ってらっしゃい。ちょっと大切なことがあるから」

「大切な事？」

そこで殺風景なリビングを思い出し、

「もしかして、リビングに家具やらが少ない事に関係あること？」

「そうよ」

と、不意に言葉を漏らし母さんに対して、俺は素っ頓狂のような声を上げるのであった。

「アゲハ、私たちはこの町から父さんが働いてる王都へ引越すのよ」

「・・・は？」

3・「アカツキ」の花」

俺は今朝早くから起きて、部屋に置いてあった物を必要なもの、必要なものと種類分けして袋詰めにする作業をしている。

「あー……少し休憩……」

時刻は現在9時。

始めたのはおよそ2時間前から多少の休憩も必要だ。
ふう、全くいつの日もこういう事は骨が折れるよなあ。
で、そもそもどうしてこんな作業をしているのかというと

それは何の脈絡もない、まさに青天の霹靂とも言える話と共に昨夜へと時間を遡らなければならない…… - -

「引越し？ それも王都に？」

「うん。王都」と、テーブルに置いてあるお茶を軽く啜る。

「でも、なんで急に？」

「父さんが王国直属騎士団に勤めてるのは知ってるわね？」

「ああ、うん」

そうだった、父さんが数年に一度しか家に帰ってこれない理由が、俺が住んでるここ、風の国の王国直属騎士団に勤めているからだ。
父さんは息子の俺を将来立派な騎士にするんだって言ってたの思い出した。

俺自身騎士という職に多少の興味があつて、

人生にも戦いにも正々堂々で、自分を雇ってくれた国王はもちろん上司や友人をととても大切にするという、まさに善人の鑑となる職。

と、俺的に騎士をまとめる。

まあ、その多くは主にゲームからの知識で、ホントの所はあまり知らない。

興味だけでホントは乗り気じゃないってのが本音かな。

……で、母さんから聞いた話では父さんは騎士団では中々良い役職に就いているらしい。

「それでね、王都から2日も掛けさせてまで毎回家に帰って来させるのは、流石に父さんがかわいそうでしょ？」

「それで王都に引越すって訳か」

なんという夫婦愛。

「そ、少しでも父さんの負担を減らすためにね」

すると父さんがリビングの脇から、

「そんなことはないぞ！」

「あなた……でも……」

「王都からゆつくり馬車で帰るつても中々楽しいし、何より新鮮だ！ 年月を掛ければ掛ける分周りが変わってるといいうのも実感で

きる！そして何より・・・」

父さんがテーブルにシチューを置いて、

「何より！ 家族に会えた時の喜びが大きいからな！」

「あら、もう」

ああ、素晴らしき家族の微笑ましい光景だ。
7歳児が言う事ではないけど。

「ま、アゲハ！」

そして父さんが嬉々として、

「父さんと一緒に騎士になろうぜ！」

何そのモンスターハンターズやろうぜ！ みたいなノリ。

「考えておくよ」

適当にそう言っていると父さんは子供のような笑顔を浮かべた。

・・・と言う事で、初めの通りに部屋に置いてあるいくつかの物を整理して、この町から王都へ引越す準備をしていた。

この事には多少は驚いたけど、俺は前の世界で3度引越しの経験をしているので割と早くから準備に取り掛かることができた。

およそ部屋の4割を片付け、部屋は殺風景の鱗片を見せ始める。

その中で小さい（今もだが）頃に貰ったであろう謎のおもちゃや、どこかに無くして虚脱感に陥ったハズのジグゾーパズルの1ピース。

これで完成できる！ という高揚感に心躍る。

ところで普段こういう小物を探しても見つからないのに、どうしてこういう場面で見つかるのだろうか？

訝しげに思いつつ、少し息抜きがてら外 - 昨日ハナと遊んだあの木に行こうと部屋を出る。すると、ダンボールを抱えた母さんがそこにいた。

「あら？ どこか行くの？」

「ん、息抜き」

「そう、よいしょっ」

下がり気味の重いダンボールを膝を使って再び持ち直す母さん。

「あまり遠いところに行っちゃダメよ」

無言で頷き、家から出た。

「ワン！」

そんな矢先に、犬。

それも柴犬らしく赤い首輪をしており、名前は……『RITSU』

……リツ……？

はて？ この犬どこかで見たような……。

「あ、アゲハだー」

上から緩やかな声でかけられたので、リツという犬から視線を声の方へと向ける。

そこに居たのはショートボブの少女、基い幼女。

「おーハナ」

「これからお出かけ？」

「ちよつとあの木の所まで」

「ふーん」

相変わらず緩い声。

と、俺はハナが抱えてる本に視線を移す。

「それなに？」

「これ？」と、俺に本を渡す。

本のタイトルは『花図鑑』だ。

この世界『セルビス』に咲く花の名称、それぞれの場所、咲く季節などを記した図鑑で俺も一度読んだことがある。

特に『ナミノハ』と呼ばれる青い花は、前の世界の花でいうとスミレに似ていたのでノスタルジックに感じたのをよく覚えている。

……俺って結構、過去とか引きずるタイプなのかもね。

「それでね！　ここ見て！　ここ！」

ハナが興奮しながら、図鑑のおよそ半分くらいに挟んであるピンク

の栞を指差す。

開くと『アカツキ』と呼ばれるヒマワリに似た赤い花の写真が写ったページだ。

しかもそのページは、恐らく何度も見返したであろうハナの手垢が着いて、少しボロボロになっていた。

「綺麗な花だな」

「でしょ！？ でもね、『アカツキ』はもう殆ど咲いてないんだって」

「どうということ？」

俺が怪訝に尋ねるとハナは腕を組み小首を傾げて、

「んーなんだっけ？ ぜ……ぜつ……」

「絶滅危惧種？」

「それ！」と、ハナが指を指して景気のいい返事をする。

「でね、ちょっとだけ『アカツキ』が咲いてる場所があるんだよ！」

「どこ？」

「町外れの裏山！」

裏山の方に指を指すハナ。

以外とすぐ近くだ。

町から北西に進んだらそこが花の咲く裏山、つまり花畑だ。

しかし町から裏山に掛けてモンスターが出るから気をつけると駐在さんが忠告していた。
するとハナが、

「でね、裏山に行つて『アカツキ』を取りに行きたいんだけど、リツと私だけじゃ……」

「ワン！」と吠えるするリツ。

確かに幼女と犬だけじゃ茨の道となりそうだな。

「じゃあ一緒に行く？」

「ホント!？」

俺が呟くと目を輝かしたハナが顔をぐいっと近づける。
急に端整な顔が来たから俺の両頬が少し紅潮していた。

「早く行こ行こ！」

ハナが俺の手を掴んで軽快に走り出す。幼女だからかハナの手はまるで乳児のような手触りだったと、まるで変態のそれに近い事を思う俺であった。

??

町を離れ向かうは裏山。

武器は大層立派じゃないけど、市販（武器屋）で売ってる木刀（240C）^{クリス}を右手に携えている。

ハッキリ言つて戦闘経験は皆無だし、モンスターといざ対面すると

ガクブルしてしまうかもしれん。
そんな事とは裏腹にハナは陽気に鼻歌をし、合いの手のように吠えるリツ。

全く真逆のスタンスだ。

こいつらに緊張感というのはないのか。

思慮しながら歩いていると、道が2つに分かれている。
その真ん中には看板が立っており、こう書いてある。

『南東：エイジタウン

北西：エイジの裏山

東：ランドリースの浜』

伝え忘れたが『エイジタウン』とは俺やハナ（あとリツ）が住む町の名称だ。

どうやらこの坂道になってる向こうが花畑らしい。ホントに近いな。
??

裏山の坂道を歩き始めて数分。

未だモンスターとは遭遇せず、平穏な旅になりそうで安堵している。
坂道の頂に着いて平らな道が広がる中で、山を伝って零れたであろう泉を見つけた。

「ハナ、あそこで少し休憩しよう」

ハナの頬に伝っている汗。

この坂道は子供の俺たちには体力的にキツイ。

「グルルル……」

リツが脚を少し折り、唸り声を上げる。

「リツ？ どうしたの？」

「何かいるのか？」

腰に下げてた木刀を握る。

リツが吠えると、奥の木陰から茶色の毛並みに、頭に木を被った二足歩行の生物が現れた。

「グルルル……」

リツは依然唸り声を上げる。

その横でハナは、

「はぁ……」

うつとりした顔でその生物を見つめていた。

確かに見た目は愛され生物（笑）だ。

女子高生

JKが見たら10人と同じ感想を言うだろう。
再度俺はその生物を見る。

「キュー？」

「か、かわいい……」

ハナがだらしない声で悶える。

くっ！ この淫獣め！ その愛くるしい容姿の上に声も愛くるしい
だー！？

「この腐れビッチがッ！！！」

俺は咆哮を上げた。

異端生物のクセに人間に媚びを売るだど！？そんな輩が「僕と契約して魔法少女になってよ」とか言うんだ！

「あはは〜……」

ハナは頬を紅潮させながら足取りを徐々に淫獣に向け進める。

するとどこから取り出したか、淫獣の手には――棍棒。

「！ 危な――」

「へ？」

気づいた頃には遅かった。

淫獣は既に携えた棍棒をハナの頭上目掛けて振り下ろ――

「ガウッ！！」

刹那、淫獣がけたたましい咆哮を上げたリツの体当たりにより吹き飛ばされる。

淫獣が起き上がりこちらを見るがリツの睨みに怯えどこかへ立ち去って行った。

「ワン！」

正しく勝利の雄叫び。

ハナが「ありがとー」と述べてリツを抱いた。

リツも嬉しそうに尻尾を振る。

油断大敵だった。

リツがいなかったらハナはケガをしていたであろう。

「アゲハーこっちおいでよー」

いつの間にか泉の元に立っており、俺に手招きをする。

「おう」

次から気をつけよう。

今回の戦闘を昨日に、心に刻むのであったが……

まさかこの後で……

人生を変えてしまう程の事件が起こるだなんて……

俺はまだ、知る由も無かった――

4・「自己投影」

息を切らしながら登り詰める眼前は裏山の頂。

道中モンスターのは出現は皆無だったので安心した。

あと数歩……あと数歩で目的の花畑に……。

意気込み深く地面を踏みつける。

「わぁ……」

地面が水平になった所で、俺は1つの景色に目を奪われた。

必然と息が漏れても仕方ない。

景色一面を色とりどりの花達が風に吹かれて、まるで俺達を歓迎するかの様に揺れている。

「うわぁ！　すごーい！！」

絵に描いたような景色にハナは輝かしい顔になり、リツも同様に大きく吠え、花畑へと駆け出して行きハナもリツに続いていく。

目から脳へ。

人間が送る電気信号のスピードの限界は0.11秒。その通達速度で海馬の記憶中枢に焼き付けるのは一瞬かつ濃厚的だ。

カメラを持っていたら絶対に収めておきたい景色でもある。

そして匂い。

風に吹かれ幾多の花達から香る匂いは、消臭剤や薬用石鹸の匂いとは比にならないほどの上質で気分まで高揚するのは致し方ないと感じる。

見渡す限りは壮麗な景色なんだけど、目的の赤い花――『アカツキ』はどこにも生えていない。

ハナが言ってたようにやはり絶滅したのか？　でも本人はあると言

つてたしな……。

花畑の向こうからハナとリツが『アカツキ』を見つけんと左右に目を配る。

確か『アカツキ』はヒマワリに類似した花だった。

大きさもヒマワリと同じなら一目瞭然なんだけど、見つからないとなるとやはり絶滅したという考えのほうに頭が回ってしまう。

花畑の中からハナとリツがしょぼくれた顔で出てきた。

どうやら『アカツキ』は無かったようだ。

「帰ろっか」

ハナは無言で頷き、俺たちは未だ風に揺れる花畑に別れを告げて裏山を降るのであった。

??

「あーあ、あると思ったのになあ……『アカツキ』」

心底残念そうな顔のハナ。

俺も見てみたかったが、現実はそう上手くできてなかったようだ。

そんなのは知ってるのにね。

「仕方ないよ」と慰めた後に、俺は不意に1つの景色に目が奪われる。

「どうしたの？」と、ハナ。

「それ」と言つて、不思議な景色を指す。

不思議な景色。

周りは日の光を浴びて悠々と風に揺れる緑に対しその箇所だけ、まるで仲間に溶け込めずに日陰で一人虚しく遊んでる――かつての俺の少年時代を重ねてしてしまう暗い穴道の寂しい景色。それに同情してか俺はしばらくその景色を眺めてしまった故に、拡がる陰の向こう側を覗いてみたいと思った。

「ハナ、この向こう側に行ってもいいかな？」

「うーん…… 暗いし、ちょっと怖い……」

「もしかしたらこの先に、『アカツキ』があるかもしれないよ？」

「えっ？」

口を上手く回してハナを誘惑、いや誘惑つてのは聴こえが悪い。同席してほしいと懇願する。

そして俺は完全にこの景色に感情移入している。

友人は多少なりいたが基本の俺は一人なので、一人ぼっちなりの遊び方というものを俺は知っている。それを10余年。エキスパートと言っても過言ではない。

例えば、読書とかゲーム（主にレーシングゲームのタイムアタックや対人ゲームの組み手勝負を延々とプレイ）などだ。

完全にインドア体制の俺の余談はさておき、ハナは熟考した結果。

「いいよ。『アカツキ』があつたら嬉しいし！」

「リツもいいか？」

「ワン！」

「ありがとう」と述べて、足取りを漆黒の中へと進める。

入りたては日の光は微弱ながらも視えていたが、奥に進むにつれ光は闇の力には及ばずと言った所だ。

パキッ、パキッと地面に乱雑に敷かれた枝を踏む度に不安が俺を襲う。

ハナとリツは俺の後ろをついて来てるのか？ 振り返って手を差し伸ばすと柔らかい感触が俺に伝わる。ハナの手だ。胸ではないぞ。

??

延々と続く陰道も佳境になり、まるで虫食いのような木々の隙間から光が漏れる。

一点、その光が強い所――すなわち出口を凝視しながら足取りを早める。

やがては俺の視界一面を白という世界が支配するがそれは一瞬の出来事であり、霞と共に徐々に多種の彩りと鮮明さをつけていく。

陰道の先にあったのは遺跡であり、相当昔に造られたようで、石柱には鳶が巻きついていたりヒビ割れが激しく所々崩れている石柱も目に見えた。

「大きいねー」と、ハナ。

俺は好奇心を抑えきれず、

「入ってみようぜ」

「えっ、危ないよ。モンスターとか出そうだし……」

「大丈夫だって、ここらのモンスター相手なら俺が守ってやるよ」

今俺カッコいい事言いました。

男だったら言ってみたいセリフベスト3くらいの勢いのセリフ言いました。

そんな俺に安心してかハナは、

「へへ……じゃあ、いこっか」

「おう」と、言っ**て**好奇心揺さぶる遺跡の中へと入っていくのであった。

5・「慟哭」

外と同様に遺跡の中は老朽化しており全くの暗闇。隙間から差し込む光も微小だがある程度の地形は把握できる。

そして天井を仰げば黒い羽を体に巻くように閉じた赤い眼光の日光嫌いもいたり、

暗い所に彼らありと、灰色の小さい体躯の家族がこちらを覗かんとしていた。

なんというか外見通りの廃れ方で、よくゲームで見る遺跡のそれと瓜二つ。

こういう場所には大抵、金銀財宝やら伝説の武具やらが眠っている可能性が高い。

つまり『アカツキ』もここに咲いてる可能性も高いわけだ。

「暗いねー」

ハナが呟く。

「ホントに『アカツキ』あるのかな？」

「それを今から探しにいくのさ」

とりあえず前進。

遺跡と言っても中身はただっ広いだけの部屋の奥に穴が1つあるだけであった。

それにしても崩れ方やらが酷いな。

風化というのも想像できるけど、凝らして見てみると刃物で斬ったような場所が所々にある。

まるで昔に戦をしたかのような、そんな傷をこの遺跡は刻んでいた。そんな事を考えていると、リツが横で何かを見ている。

俺もリツの視線の先を見たが、そこは多量の瓦礫が積まれてあるだけだった。

しかしリツはそこを凝視し続ける。

それに気づいたハナがリツに問いかける。

「リツ、あそこに何かあるの？」

リツは息を荒立てて凝視を続けてる。

よくみると僅かにリツが入れそうな隙間があり、そこで何かが赤い輝きを放っていた。

「よし！ リツ！ とつてきて！」

待つてました！ と言わんばかりに瓦礫の山へと駆け出し、麓の隙間に体を押し込む。

体の半分が埋まった所でガキンと金属らしきものを噛んだ音が聴こえ、後にリツが隙間から出てきてこちらへと帰ってくる。

「それなに？」

リツが持ってきたのは緑よりかは翠に近い色で、中には粒子が集まる瞬間を留めたかのような作りの玉だった。

それを俺の足元に置く。

「あげるって言ってるよ」

ハナが通釈するとリツはジツと俺を見てた。

この世界に転生して始めて友達（でいいのかな？）から貰ったプレゼント。

俺はそつと受け取りリツの頭を撫でる。

「よし行こうか」

ハナ達にそう言い表して、

奥の穴の中へと足取りを進めるのであった。

??

罨もなく分岐点もなく時折現れるスライム等のモンスターを倒しながら、

ただ真つ直ぐな道を歩き続けると、少しだけ広く、中央に小さな台座のような場所がある部屋に着いた。

「あ！」

ハナが声を上げて台座に指を指す。

穴の空いた天井から一筋の光を浴びながら淡い赤を放つ物がそこにあり、凝らして見てみるとヒマワリのような花が2輪咲いていた。

ヒマワリのような赤い花 - 『アカツキ』がそこに凜々しく咲いていた。

「やったあ！！ 『アカツキ』だあ！！」

これとない異数を誇る『アカツキ』を目の前に手の舞足の踏み場を知らずのハナ。

砂利も飛ぶ勢いで『アカツキ』の元へと駆け寄る。おかげで靴の中スゴいジャリジャリ。

「うわぁ……!!」

雀躍として『アカツキ』の前に立つハナ。それを手中に収めんとしたところで、俺の体は圧迫感に支配されていた。

何かがここにいる……。

その強烈な圧迫感の正体は『アカツキ』の方面から感じている。恐らくモンスター。

それもここら一帯とは比べ物にはならないほどの強靱な……。でもこれほどの気配を張り詰めておきながら姿が一向に見えない。四方八方に視線を移すけどどこにもいない……。焦燥感からか頬を伝う汗が鉛のように重い。

そしてその時は、ハナが『アカツキ』の茎に触れた瞬間に始まった。

「えっ？」

『アカツキ』の根元から泡が現れてハナは愕然とする。

更に泡は多く、大きくなり『アカツキ』を包んでハナの等身と同じ高さになると、泡の一部が赤く光り鋭い、それも狂気を孕んだような鋭さを持つ目を作りあげてハナを見る。

それに合わせて俺は木刀を抜いて泡の形をしたモンスターへと走り出す。

「あ、あ……」

まさに蛇に睨まれたカエル。

目の前の現状をどうする事もできず、ハナは立ち尽くして息を漏らすしかなかった。

そしてモンスターの目が鋭さを増した時、体はハナの体を大きく越えて咆哮を上げていた。

「ハナ！ 下がれ！！」

こつちを振り返るハナの襟を掴んで乱暴に後ろに下げる。

そしてモンスターを縦に一閃すると激しい破裂音だけを残して消えた。

「大丈夫かハナ！」

「うん……ちょっとおしり痛いけど……」

それはスマン。

すると足元から水の沸騰する音が聞こえ、振り返ると先程のモンスターが赤い目を覗かして俺を睨んでいた。

再度木刀を振ろうとした瞬間、モンスターがいびつな咆哮を轟かせこの部屋の大気を振動させる。

耳を塞ぐのが遅れた俺は鼓膜に痛烈な衝撃を直接喰らい、更には三半規管にも波紋が届いたようで、体のバランスが上手く取れないでいた。

それが引き鉄となり、モンスターの攻撃で俺の体は強烈なインパクトに襲われた。

「かつ……！！」

喉越しに血と声にならない声が漏れて、モンスターとのディスタンスを感じた後に背中全体に再び衝撃、更には重力直下の大地の抱擁を受けた。

「ごほっ……!!」

「――!!」

口からは血が湯水の如く溢れている。
感覚器官は生きてるが体は動かない。

こいつはヤバイ。

ハナとリツを連れて逃げないと……。

早く……。

動け……!

動けよ……!!

そう思ってる中で、モンスターは体を作りあげてハナを攻撃しんとしていた。

「逃げるハナア……!!」

全力で叫んだ。

体が軋んで激痛に蝕まれようがそんなことは知ったこっちゃない。
今はハナを。リツを。

ここから逃がさないと……！

「リツ！ 待って！」

ハナが叫ぶが、俺の横をリツが走り過ぎて行く。

犬でもやはり命は惜しいらしい。

友達よりも自己優先。

リツは本能に従ったまてである。

「ハナ！ 早く……」

遅かった。

姿を作ることができる。

あのモンスターの能力なら、自分の腕を伸ばしてハナを攻撃することなど容易なことだった。

――そう。腕を伸ばしてハナの体を貫くことなど、あのモンスターにとっては容易なことだった……。

俺の顔にハナの血が飛び付く。

俺は果てしなく絶望した。

こんな形で人の死を見ることになるなんて。

自己嫌悪を混じえた現実逃避したくなるような絶望。

体は震え、目からは涙が零れる。

俺が次にした行動は、目の前の事実から逃げるように地面に慟哭を上げることだった。

6・「十字架を背負う事」

胸にはなにやら固いような柔らかいような物が触れている。
加えて体は軽く上下に揺れ、膝裏には先程の感触と似ているものが触れている。

依然として視界は黒く、瞼には錘を着けたように重たい。

その力に抗いながら瞼を開くと、そこには印象派で描かれたような世界が広がっていた。

それも徐々に消え去り、やがては彩りや光加減が明確になっていく。
ふと何気なしに下を覗くと、茶色いモノが俺を見て叫んでいる。四つ足に希望を乗せて地面を駆けるその姿はどこか懐かしい雰囲気を感じ出させてくれた。

「……リ、ツ……？」

「……目が覚めたか」

聴き覚えのある声が耳を通る。

「とう、さん……？」

あれ……どうして俺……父さんの背中の上で寝てたんだ……？

「なんで……俺……」

そこで父さんの足は止まり、低い声でこう呟いた。

「覚えてないのか？」

覚えて……？
どういうこと……？

眠りから覚めたばかりの自分の脳じゃうまく解析できていない。
言うなら、映像にジャミングとノイズが攻めてきた状況だ。

しかしその2つに修正を掛け始めたのはリツと、服で乾いた液体とズボンのポケットに覚える違和感。

父さんの背中から降りてポケットの中に手を入れる。

すると何やら表面がツルツルとした物に触れ、引き抜く。

大きさはソフトボールくらいで色は緑より翠に近い色で、中に粒子の集まる瞬間を留めたかのような作りだ。

「……っ！」

それを見た瞬間、

脳に強烈な電撃が迸る。

侵食、脳が冒され、聴覚にはモスキート音が鳴り、顔は青ざめると分かる具合に変な汗がどっと滝のように溢れて、呼吸は乱れる。

更に喉元にはネバつとした物が胃から押し出し、体は震え、三半規管は不機能で並行は崩れ、視界は黄色で武装された軍団が世界を支配せんとし、意識の渦中は消失の一途を辿る手前、

俺は地面にうなだれた。

「……！」

瞬間、

- - 始まった。

壮絶な程の逆再生。

ノイズ、ジャミング、カラーリング、キャラクター、シーン、タイム、バックグラウンド、パラダイムシフト、サウンド、ビジョン……

戻る、

全テ

戾ル

-
-
戻る時間人物戻る戻る背景戻る色戻る表情逆再生逆再生逆再生逆再生
生逆再生逆再生逆再生逆再生逆再生逆再生逆再生逆再生逆再生逆
逆逆逆逆逆逆逆逆逆逆逆逆逆逆逆逆逆逆逆逆逆逆逆逆

-

??

溢れ出す紅の湧き水。

それを堰き止めようと手を乗せる。

しかし湧き水は隙間から零れ、落ち着く気配など微塵もなかった。

目、頬に伝う雫。

重力、紅に混じる雫。

嗚咽、震える俺の肢体。

触れる、冷たい、

動かない――俺の『友達』

渦巻く感情、不明。

明確、無力な自分。

そんな俺が取る行動は、『ハナ』を殺したモンスターを見て、蛇に睨まれたカエルのように竦むしか他無かった。

次は俺が殺される……。

逃げないと……！

「あ、足が……動か、ない……」

ジロリ、とモンスターの目が鋭くなる。

振りかざすモーシヨン、手先を鋭利な物質に変化させて俺の体を穿たと腕を伸ばす。

俺との距離、数メートル。

あ - -

死ん - -

グシャッ!!

生々しい音を立てて貫かれる俺のから - -

「？」

貫かれてない……？

恐る恐る目を開くと、モンスターの腕は何かに切断させられた跡を残していた。

その何かの謎は意外と早めに解決した。

「大丈夫かアゲハ！」

鋭利な剣を携え、凜として青髪。

「父さん……！」

「ワンワン！」

「リツ……！ 逃げたんじゃなかったのか……」

リツが石みたいに動けない俺の頬を舐める。
俺はリツを抱く。

「ごめん……っ！ ごめんなあ……っ！」

リツは俺を慰めるように頬を舐め続ける。
舐められる度に増えていく涙。

「もう大丈夫……ここからは父さんに任せろ」

「……うん……っ」

父さんとリツが来た事による安堵からか、俺の意識はここで途切れ
た。

??

「そうだ……ハナは……！」

「ハナちゃん、というのか……彼女は……」

この目、この手で確かめた。
嫌だと言うほどに焼き付いた。
夢であつたら冷めて欲しい。
そんな空虚に縋りたくなるほどに逸らしたい現実。

「……亡くなった」

「！」

改めて……それを知る。

そう、ハナは死んだ。

「俺の……所^{せい}為だ……」

「アゲハ……」

「俺の所為だ！！」

声を荒立てて憤る。

「俺が……！俺があんな、モンスターが出そうな場所に……行こ
うって誘ったから……！ハナを……ハナを……っ！！」

爪を立てて土を掴む。

「ちくしょう……！何でハナなんだよ……！何でハナが……！」

土を握る手に力を加える。

「それでアゲハ、お前はずっとそこで地面にうな垂れてるだけなのか？」

「そんなの……俺にどうしろって言っただよ……」

目を腕に擦り付けて叫んだ。

「俺がハナの代わりに死ねば良かったんだよっ!!」

突如体を仰向けにされ、頬を叩かれる。

「っ!」

「そうやってずっと……! 自責の念に塗れてうな垂れたままでもいいのかって訊いてんだよっ!!」

「だから……!」

「悔しくないのか!？」

父さんは俺の肩を強く掴んで、

「大切な友達を……ハナちゃんを守れなかったんだぞ!？」

「それは……俺が……」

「ああ! 弱いからだ!!」

俺は唇を噛む。

「そんなの俺が1番知ってる!! ハナを守れなかったのは俺が弱いからってのも知ってる!! 目の前で動けなかったのも……知ってる……! 歯が立たなかった……ことも……知ってる……っ!」

俺は父さんの胸に顔を埋め、地面に膝を着いて呟く。

「ちくしょう……悔しい……強く……強くなりたい……っ」

父さんの手が頭に触れ、

「ああ……強くなりたいか……？」

「なりたい！　強く！　強くなりたい！！」

「それなら、父さんと一緒に強くなろう」

俺は父さんの服を強く、強く掴んで涙で濡らす。

「これから出会う人達を守れるように、父さんと一緒に強くなろう」

俺は無言で頷いて、大切な友達を失ったこの場所を後にした。

??

馬車を引っ張る馬は2頭。

血統書付きのサラブレッドがこの町『エイジタウン』から王都『ウインドル』へと乗せて行く。

俺は我が家の荷物が乗った馬車の中でうずくまっていた。

遠くで父さんと、ハナの親らしき人と会話をしている。

女の人は泣き崩れて、男の人は女の人を介抱する。

その脇で、ハナの妹だろうか？　紫色の髪が綺麗な女の子が2人を見ていた。

それを観て涙腺が緩む。

ホントに取り返しのない事をしてしまった。

間もなく馬車に母さんと父さんが乗り込む。

それを合図に馬車は『エイジタウン』を離れて『ウィンドル』へ向かって馬蹄を鳴らす。

父さんと母さんは、俺に気を遣ってか話掛けてはこなかった。

俺は窓に頭を当て、景色を横目に考える。

亡くなった人の分まで生きる。

それは一生許される事の無い十字架を背負う事。
頭の中では分かっている。

俺は今日の出来事を忘れることを許されない。
生半可な覚悟で生きることが許されない。

強くなる。

それが唯一出来る、俺なりの謝罪。

序章：異世界転生 【完】

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2024y/>

魔力ゼロのチート勇者。

2012年1月10日23時45分発行